

2016年3月20日 礼拝メッセージ

聖書：ヨハネの福音書 18章 1～11節

説教：それはわたしです

1 暗やみの中で

1) オリーブ山に向かう

今日からイエス・キリストの十字架の苦しみを思い起こす受難週が始まり、来聖日はイースターとなります。今日はそのことになんだ箇所を開いております。

1節に「ケデロンの川筋の向こう側に出て行かれた」とあります。先週、行かせていただいたイスラエル旅行で実際にこの場所を見ることができました。エルサレムは標高がおよそ七百メートルの山の上に建てられた町だと説明されます。日本で「山」というと、藻岩山とか定山溪の山を思い浮かべるかもしれませんが。しかし実際、エルサレムは山と言うよりもなだらかな高原の上に立っているように見えます。では平らなところかと言いつつそうではなく、町の中には結構な坂道があちらこちらにあつて、山の斜面に家が建ち並んでいたり、小さな谷があつたりする、地形としては複雑な形をしています。

イエスが弟子たちとエルサレムの町を出て向かったのは、エルサレムのすぐ目の前に小高くそびえ立つオリーブ山です。そのオリーブ山の中腹にオリーブの木が沢山生い茂っているゲッセマネの園と呼ばれる場所があります。1節のところに「そこに園があつて」とあるのはその場所のことです。エルサレムの町とオリーブ山、この二つの間に細長く窪んでいるところがあつて、それがケデロンの川筋と呼ばれています。オリーブ山に立ってエルサレムのほうを眺めると、町の中が全部見えるのではないかと思えるほど

近い。今は車の騒音でそうはいきませんが、昔であれば山から町に向かって叫べば声が届く距離です。

イエスと弟子たちはエルサレムの町の中で最後の晩餐のときを過ごした後、町を出て坂道を一旦下り、ケデロンの川筋を越えてオリーブ山に向かいました。歩いて20分ほどの距離でしょうか。日はとつと暮れていきます。慣れた道ですから迷うことはありませんが、あかりがなければ誰が誰なのか見分けが難しいほどの暗やみです。

2) ねらわれるイエス

他の福音書によれば、イエスはエルサレムに来てから、昼間は町の中におられても夜になると必ず町を出てオリーブ山で過ごしていたようです。ですから、イエスはいつもの習慣でオリーブ山に向かわれたということになります。

さて、ここでイエスがずっと前からパリサイ人や律法学者、祭司長たちからのちをねらわれている状態にあることを思い出していただきたい。エルサレムは、反イエスの旗を掲げている人たちの本拠地です。イエスがこれからエルサレムに向かいますと話されたとき、弟子たちは「本当に大丈夫だろうか」と心配するほど危険を感じていた。突然テロリストに襲われて殺されるかもしれないのです。テレビなどで私服の警官が目を鋭く光らせて重要人物を警護しているのを見たりしますが、弟子たちもいざとなったらイエスを守ろうという心構えはしていたでしょう。

実際、10 節を見るとシモン・ペテロは、そうしているわけです。それくらい危険な場所にイエスと弟子たちがいたということです。

そういうところですから、エルサレムの町に滞在している間、何が安全で何が危険かを常に考えなければなりません。どこが安全な場所だったのでしょうか。家の中ですか。そうかもしれませんが、しかしそれではなにもできません。最も安全なのは、逆説のようですが、イエスを支持する人たちに囲まれているときです。そうしたら敵は手を出せません。でもいつもそうしているわけにはいかない。ひとりぼっちに近い状態になるときがある。それでも敵にねらわれにくくするために、スパイ映画のようですが、身を守るための鉄則があります。敵に行動パターンが読み取られないように、わざわざ不規則な行動をします。毎日同じ道を通らない。同じ時間に同じ所に行かない。

では実際どうだったか。2 節。「ところで、イエスを裏切ろうとしていたユダもその場所を知っていた。イエスがたびたび弟子たちとそこで会合されたからである。」

「たびたび」とありますが、正確には毎日夜になると同じ場所に行って会合していました。ユダが目をつけたのがこの行動パターンです。この情報こそ、敵がのどから手が出るほど欲しがっているものでした。イエスがいつも会合をしていた場所は町の外ですからイエスを支持する群衆はいません。しかも夜です。イエスを捕まえても騒がれる気遣いはありません。イエス逮捕の絶好のチャンスです。ユダは銀貨三十枚でこの情報を売り、それが今日の場面になっています。スパイの行動原則から見れば、イエスは失敗したことになります。イエスは失敗したのでしょうか。

それはまた後で触れたいと思います。

2 だれを探すのか

1) 問答を二度くり返す

イエスが弟子たちとともに、オリーブ山にある園に着いてしばらくすると、ユダがたいまつと武器を手にした大ぜい人たちを連れてやってきました。イエスが、「だれを捜すのか」と尋ね、彼らは「ナザレ人イエスを」と答えると、イエスは「それはわたしです」と言います。そんなやりとりが二度くり返されています。少し不思議に思わないでしょうか。どうしてイエスは「だれを捜すのか」と尋ねるのでしょうか。一度答えれば十分なはずです。いや、そもそもこんな質問などする必要はない。4 節に、「イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので」とあるではないですか。それなのに二度も同じことをくり返す。同じことをくり返しているのなら、それにはきちんとした理由があるはずで

2) この人たちはこのままで去らせなさい

ヒントは、1 節、2 節にすでに埋め込まれています。そこにくり返されていることばがあります。どれでしょう。「イエスは弟子たちとともに」、「イエスは弟子たちといっしょに」、「イエスが弟子たちと」、これです。イエスが弟子たちといっしょにいきました。そこへ、殺気立った人々が手にたいまつと武器を持ってやって来る。その場面を想像してみてください。皆さんがイエスであったら、そのとき何を考えますか。「どこへ逃げようか」でしょうか。では、イエスは何を考えたか。8 節にあります。「それはわたしだと、あなたがたに言ったでしょう。もしわ

たしを捜しているのなら、この人たちはこのまま去らせなさい。」「この人たち」とは、弟子たちのことです。イエスは人々に向かって、「捕まるのは自分だけで、ひとりで十分弟子たちには手を出すな」と言っておられるのです。でも、「手を出すな」と言ったから、相手が「はい、そうですか」と素直に従うとは限りません。普通は無視されるでしょう。ではどうやったら従ってくれるか。自分の方から言うのではなく、相手の口で言わせてしまうのです。どういうことでしょうか。

イエスが「だれを捜すのか」と問いかけたとき、彼らはなんと答えましたか。「ナザレ人イエスを。」自分たちが捕まえようとしていたのは、ナザレ人イエスであって弟子たちではない。そのことを二度くり返させる。まずそんな準備をさせてから、イエスが「弟子たちを去らせなさい」と言えば、自分の口で言った手前従うしかありません。イエスが同じ質問を二度くり返したのは、弟子たちを守るためであったことがこれでわかります。

これで問題解決、と言いたいところですが、本当にそれだけなのか。もう少し掘り下げたいと思います。

3 父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう

1) 神の名

一度目のやりとりの場面でイエスが「それはわたしです」と言われたとき、それを聞いた人々はあどずさりして、地に倒れたとあります。これは不思議です。なぜ倒れるのか。変だと思いませんか。種を明かします。「それはわたしです」ということばは、ユダヤ人にとって実は神の名前とまったく同じことばであったということがポイントです。

モーセが荒野で主の名前を尋ねたとき、神は仰せられました。「わたしは、『わたしはある』という者である。」この「わたしはある」が神の名です。「それはわたしです」は、ユダヤ人には神の名に聞こえるのです。モーセの三番目の律法に「あなたは、あなたの神の御名を、みだりに唱えてはならない」とあって、神の御名を口にするのはタブー中のタブーです。そのタブーをイエスはあっさりと破り、神の名前を語ったのですから、腰を抜かしてしまったということになります。

そうは言っても、私たちには少しぴんと来ないかもしれません。別に倒れることでもないのでは。そう疑う。でも今回の旅行で教えられたのは、いかにユダヤ人たちが律法を守ることに熱心で、律法を喜んでいるかでした。マクドナルドがエルサレムにできたときには、律法に反すると言って大変な抗議行動が起きたのだそうです。私たちには笑い話ですが、一事が万事そういう状態です。イエスのことばに腰を抜かしたとしても決して不思議ではないと感じます。

2) 杯を飲まれる神

イエスは言われました。「それはわたしです。」なぜイエスはこのことばを使われたのでしょうか。結局、イエスは何を見ておられたのでしょうか。11節。「剣をさやに収めなさい。父がわたしに下さった杯を、どうして飲まずにいられよう。」直訳はこうです。「わたしは絶対にこの杯を飲まなければならない。」

イエスのご自分が神の御名を持つ者であることを、二度繰り返してはつきりと明らかにされました。水戸黄門で言えば、「この印籠が目に入らぬか」と言ったところに似ています。では、ただご自分の権威をひけらかし、

敵を打ち負かすためにそう言われたのでしょうか。そうではありません。反対です。イエスが示してくださった神の御名は、私たちをひれ伏させて、従わせるため語られたのではない。

いったい、神の怒りの杯を飲まなければならなかったのは誰か。私たちです。その神の怒りの杯をこの方が代わりに飲んでくださる、そのことをはっきりさせるために語られた御名でした。だから言われたのです。「この人たちはこのまま去らせなさい。」弟子たちは、十字架にかかってはならない。私たちも絶対に十字架にかかってはならない。十字架にかかり、杯を飲む者とは、神の御名を持つ方ただお一人である。主はオリーブ山の園で人々に語って下さいました。わざわざ毎日同じ時間に、同じ場所で会合をもつようにして、敵に逮捕させる格好のタイミングを用意させて、そうされるのです。失敗したのではありません。確信を持ってそうされました。

苦しみを味わうためにご自分の御名を明らかにして下さった主の御名をほめたたえます。